
わが国におけるイベント開催時の医療救護派遣の実態について

(林 靖之ほか、日本集団災害医学会誌 17:372-376, 2012)

2017年6月30日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

[要約]

災害医療派遣チーム（以下 DMAT : Disaster Medical Assistance Team）は、医師、看護師、業務調整員（以下、調整員）で構成され、大規模災害や事故の現場で急性期に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けたチームである。調整員の役割は、主にロジスティックス、すなわち、被災地で医療活動を展開するために必要な人員確保、通信環境の確立、医療資器材の手配、行政機関等との調整などの業務全般を担っている。このロジスティックスは災害医療活動を円滑に遂行するために重要で、調整員により災害医療活動の成果が左右されると言っても過言ではない。

しかし、東日本大震災では、通信環境の確立が困難となり、DMAT 各本部の事務作業量が膨大となり、統括 DMAT 登録者をサポートする要員の不足が生じ、ロジスティックスに関する課題が多く報告された。この理由として、調整員は本来の職種の業務と大きく異なる多種多様の調整業務を担当するため、知識の習得や技能の向上が困難であること、また、調整員を各地域で養成するには、現在の研修会だけでは、回数的にも時間的にも不十分であることが挙げられる。この東日本大震災の経験を踏まえ、厚生労働省では「災害医療等のあり方に関する検討会（平成 23 年 10 月 26 日）」が開催され、DMAT 事務局や DMAT 都道府県調整本部等に入るロジスティックス担当者や、病院支援・情報収集等を担う後方支援を専門とするロジスティックス担当者からなる専属チームの要請を行うべきであると報告された。今後、非常に広域な被害が危惧される東南海・南海地震やそのほかの広域災害が発生した場合にも、同様にロジスティックスの重要性が高まることは間違いない。阪神・淡路大震災に見舞われた近畿ブロックでは、全国に先駆けて近畿地方ロジスティックス検討会が平成 20 年 10 月に設置され、その研修会が過去 7 回開催され、調整員も養成されている。一方、そのほかのブロックでは、まだブロック主催の研修会が開催されていない。

以上より、今回、中国ブロックと四国ブロックの調整員がロジスティックスに関する知識の習得、技術の向上、関係者と連携して組織的に強化する目的から「中国・四国災害医療ロジスティックス検討会」（以下、検討会）を立ち上げた。この検討会の今後の適切な運営のために、検討委員と各県災害医療担当部局職員（以下、県担当者）に対してアンケートを行った。その結果をもとに、最適と思われた運営方法について以下にまとめる。

各ブロックには DMAT と各関係機関、各県との連携を図る目的でブロック連絡協議会が設置されている。この連絡協議会で、各ブロックの DMAT 隊員と各県担当者が連携し、研修会の開催や訓練などの運営を行っている。よって、連絡協議会の下部組織として検討会を位置づけた。こうした位置づけにより、県から開催を通知することが可能となり、少しでも参加しやすい体制となった。医師、看護師に比べ、共通の学会など顔を合わせる機会が少ない調整員において、このような場は非常に有用であると考えられる。また、連絡協議会と検討会は各県持ち回りで担当することになり、検討委員は各県から最低 1 名選出された。これにより、各県に事務的負担が分散される上、各県同士の普段からの連携が強まるため、災害時においても普段接点の少ないお互いの連携強化にも繋が

ると考えられる。

また、このような自発的な組織化、検討会・研修会の開催の必要性については、各ブロックの調整員のほぼ全員が考えているようだ。逆に、県担当者側も、県主催の研修会や訓練、災害時における派遣などには調整員との連携が必須であり、平時から連携をとることが必要だと考えているようだ。しかし、職場での理解や開催経費、地域の取りまとめ役や事務的な負担に対し、不安を抱えていた。検討会、研修会の開催回数については、各ブロック年間1回を基本とし、地方ならではの交通事情も考慮して、すでに開催されている技能維持研修や実動訓練に付随した形で開催するのが最適とされた。そして、平成24年8月4日、5日に四国ブロック中心に、初めて「平成24年度第1回中国・四国災害医療ロジスティック研修会」が開催された。今回は中国ブロックでの開催を検討中である。このように交通が不便な環境や、職場の不理解など不安な点がといった問題点を乗り越えながら、体制を整え研修会を行ったことは、他のブロックのモデルケースになると思われる。

[考察]

業務調整員の仕事を考察する。現地での機動性を高めるために、DMATチームの人員は必要最低限の人員で構成され、医師1~2名・看護師2名・業務調整員1名であり、自己完結型で行うことが原則である。よって、業務調整員は1人で多種多様な業務をこなす必要がある。主な業務は、災害現場での活動補助および記録、必要機材の手配、活動スケジュール管理、活動に関する環境整備、各関係機関、ほかのDMAT等との連絡・連携、隊員の安全確保・健康管理などである。もし、これらの管理が不十分となると、二次災害を引き起こす可能性があるため、業務調整員の役割は非常に重要である。そのため、業務調整員には、非日常的な環境の中で可能な限り収集した情報、資材を解析、提供し、いかにチームの能力を最大限発揮させることができるという能力が求められている。しかし、業務調整員には、看護師、放射線技師、作業療法士、理学療法士、病院事務など様々な職業の人が担当している。よって、それぞれにどのような研修が必要なのか、少しずつ異なっており、統一した研修を行うことが困難であるという課題がある。そこで、全国に先駆けて近畿地方でロジスティックス検討会を参照すると、そこでは、簡単な講義のあと、通信方法の手段としてトランシーバーの実技、クロノロジー（経時記録）の実技、ドクヘリや各医療機関との連絡方法など、実践的な内容が行われたようだ。本当は実際の現場を見なければわからないことも多いだろうが、少しでもそれに近づくよう工夫されていた。また、コミュニケーションが重要であるため、訓練などを通して普段から顔見知りを作っておくことも重要であると感じた。

四国・中国ブロックでも、このような活動が展開されることが理想と考える。

[参考文献]

- ・災害派遣医療チームにおける臨床工学技士の役割と参入意義
独立行政法人国立病院機構九州医療センター臨床工学室・同救急部
- ・DMAT研修に参加して 兵庫県立病院薬剤部
- ・大阪急性期・総合医療センター 救急診療部 基幹災害医療センター